

メディアスポーツディスコースの対照研究の可能性

多々良 直弘

A Contrastive Analysis of Sports Broadcasting Discourse in  
English and Japanese

TATARA Naohiro

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』第10号 2019年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

*Studies in Language and Culture*, The Tenth Issue, March 2019

キーワード：メディアスポーツ、対照研究、認知資源、全体的把握、分析的把握

## 要 旨

近年オリンピック・パラリンピックやワールドカップなどに代表される様々な国際大会が世界各地で開催され、通信技術の発展により様々なメディアを通じて我々のもとへ配信されている。スポーツとスポーツを報道するメディアは融合し、メディアを抜きにしてスポーツを語ることはできず、またメディアも社会におけるスポーツの重要性や人々の関心の高さを軽視することはできない。スポーツ実況中継の重要な目的は、適切かつ十分な情報を視聴者に提供し、視聴者の興味を失わせないことである。どの文化でも視聴者が期待する適切な情報を伝達することが実況解説には求められるわけだが、試合の中で起こる出来事の異なる側面が言及されたり、同じ出来事が異なる形で解釈されたりし、試合の中の何を言語化するのかにより、各言語で異なる物語が創り上げられる。本稿はサッカーの実況中継により創られる英語と日本語のメディアスポーツにおけるディスコースを比較分析し、それぞれの話者がどのような認知資源に注目し、異なる物語を創り上げているのかを考察する。

## 1. はじめに

スポーツ実況中継の重要な目的は、適切かつ十分な情報を視聴者に提供し、視聴者の興味を失わせないことである。どの文化でも視聴者が期待する適切な情報を伝達することが実況解説には求められるわけだが、補足的な背景情報が提供されたり、試合の中で起こる出来事の異なる側面が言及されたり、同じ出来事が異なる形で解釈されたりし、試合の中の何を言語化するのかにより、各言語で異なる物語が創り上げられる。言い換えれば、実況中継の参与者たちは、目の前で起こっている出来事の全てを忠実にことばで再現しているのではなく、ある特定の視点から言語化する認知資源を選択し、ある種の物語を創り上げているのである。本稿はサッカーの実況中継により創られる英語と日本語のメディアスポーツにおけるディスコースを比較分析し、それぞれの話者がどのような認知資源に注目し、異なる物語を創り上げているのかを考察する。

## 2. スポーツイベントとメディアスポーツ研究

近年オリンピック・パラリンピックやワールドカップなどに代表される様々な国際大会が世界各地で開催され、スポーツのグローバル化が進んでいる。このような世界各国の代表が参加する様々な国際大会が、通信技術の発展により様々なメディアを通じて我々のもとへ配信されている。スポーツとスポーツを報道するメディアは融合し、メディアを抜きにしてスポーツを語ることはできず、またメディアも社会におけるスポーツの重要性や人々の関心の高さを軽視することはできない。これまでのテレビ視聴率を振り返ってみると1964年の東京オリンピックにおける女子バレー日本対ソ連の試合の視聴率が歴代2位の66.8%を記録している他、オリンピックやワールドカップなど多くのスポーツイベントが歴代視聴率の上位に入っていることから（ビデオリサーチ調べ）、スポーツとメディアは切っても切れない関係にあることがわかる。

スポーツにはその社会の特徴が反映されており、社会を映し出す鏡であると言われることもあるが、そのスポーツを報道するメディアにも社会の文化的価値観が凝縮されている。一般的にメディアはスポーツの試合を客観的に報道していると考えられがちであるが、実際には何らかの文化的基準に基づいて、特定の視点から試合のある側面を取捨選択したり、もしくは情報を加えたりすることを通じて、スポーツイベントを編集して我々のもとに報道している。我々はスタジアムでスポーツの試合を直接体験することもできるが、大多数の人々は実況中継や試合後のニュース報道などのメディアというフィルターを通じて、メディアによって彩られ、切り取られた「メディアスポーツ」を観戦するのである。

これまでスポーツの実況中継を扱った研究は多岐にわたり、アメリカン・スポーツの実況中継のレジスターを分析したFerguson(1983)、サッカーの実況中継のレジスターを分析したBeard(1998)、英語とドイツ語の実況中継において使用される動詞の統語的、意味的特徴を分析し、両言語の類型論的な差異を考察しているKrone(2005)、サッカーの実況解説と映像の関係を分析し、刻一刻と変化する状況において、コメンテーターたちがどの

ように実況と解説を行っているのか、マルチモーダルな分析を行っている Gerhardt(2008) などが挙げられる。また日本語の実況中継に関しては、高校サッカーの実況中継において創られる物語を分析した深澤 (2010; 2012) やワールドカップの実況を分析した山本 (2003), オリンピックの実況解説におけるアナウンサーと解説者の相互行為を分析した岡本 (1999) や三宅 (2004) の分析、エスノメソドロジーの観点からオリンピックの実況中継を分析した岡田 (2002) の分析などがある。また、劉・細馬(2016)はカーレースの実況中継においてアナウンサーと解説者が使用する「反射的な声」(Goffman 1981; 岡田 2002) を発する間投詞の使用方法に注目し、その後に発せられる発話の構造的な違いを分析している。

本稿はテレビで放映された英語と日本語のサッカーの実況中継における言語行動を分析する。スポーツの実況中継は絶えず変化する流動的な試合の中から、参与者たちがある認知資源に注目し、言語化することで構成されていく。実況中継の参与者たちはボールと選手が絶えず移動する流動的な試合を即興的に描写、解説することが求められるわけだが、文化によって試合の中で起こる同じ出来事が異なる形で解釈されたり、異なる側面が言及されたりすることがある。実況中継というジャンルはFerguson (1983) やBeard (1998) が指摘している通り、様々な独特の言語表現が使用されているが、本稿で扱うフットボール(サッカー)は各国の国内リーグ、クラブや各国代表が参加する国際大会が世界各地で実況報道されており、同じ試合が通訳や翻訳を介さずにさまざまな言語で放送されているため、各言語で注目され言語化される認知資源や好まれる言語表現の特徴を比較分析するためには非常に良いデータであると言える。

### 3. スポーツ実況中継の対照分析

現在サッカーは各国の国内リーグ、クラブや各国代表が参加する国際大会が世界各地で報道されており、同じ試合が通訳や翻訳を介さずにさまざまな言語で放送されている。実況中継の参与者たちは、ボールと選手が絶えず移動する流動的な試合を即興的に描写、解説することが求められるわけだが、文化によって試合の中で起こる同じ出来事が異なる形で解釈されたり、異なる側面が言及されたりすることがある。

多々良 (2017) は2013年から2014年に行われた10試合において選手が明らかなミスをし、試合の流れに大きな影響を与えた30の場面(例えば、不要なファールや得点に直結するミス、簡単なシュートミスなど)を描写している英語と日本語によるサッカーの実況中継を分析し、両言語の実況中継の参与者たちが同じ試合における同じ出来事を描写する際に、どの認知資源に注目し、言語化するのかを考察している。特に、サッカーの実況中継において日英語の参与者たちが選手のミスに対してどのように批判を繰り返すのかを考察している。英語の実況解説ではコメンテーターたちは客観的に選手のミスや動きを描写し、ミスを犯した選手とその原因を追究し、厳しい批判を投げかける。一方、日本語のアナウンサーや解説者たちは、批判をするだけではなく、ミスをした選手の視点から選手のお

かれている状況を描写したり、選手の思考内容を推察し、意図を理解しようとする。またプレーの中心にいる個人の動きを描写するよりも、その周りの選手たちにも注目し、チームとしての連帯や協力の重要性を強調するストーリーを参与者間で創り上げるという特徴も観察される。以下では、ミスをした場面だけでなく、ゴールシーンなど選手を称賛する場面の実況中継のディスコースを事例とし、英語と日本語の特徴を考察する。

### 3.1 客観的な英語の描写と選手の内面を描写する日本語のディスコース

英語の実況中継におけるサマライザーとコメンテーターたちは選手たちのプレーを客観的に分析し、単純なミスや不必要なファールに対しては、ミスをした選手を特定し、その選手の動きを描写し、厳しい批判を繰り返す。一方日本語の実況解説では、選手たちの動きを単に客観的に描写し、単にミスをした選手を批判するのではなく、内的引用（野村 2006）を用いて選手の意図を理解し、共感しようとしたりするという特徴がある。

野村（2006）はミスター・オー・コーパスを使用し、日英語のナラティブにおける引用を分析しているが、日本語のナラティブの方が英語よりも引用を多用すること、英語は発言内容を引用する傾向が強いが、日本語の方が登場人物が心の中でどのように思い、感じたのかを引用する思考内容の引用が多いことを指摘している。日本語の実況中継においてもこの特徴が見られ、単に選手のミスを批判するのではなく、選手の内面に立ち入って、選手の意図を理解しようとする特徴が観察される。英語の実況解説が客観的に選手の動きを描写しているのに対して、日本語では刻々と変化する状況を描写する際に、選手の動きを客観的に描写するだけでなく、描写対象の心の中を推察し、その内容を自身のことばとして描写するのである。単に出来事を客観的に述べ、批判を展開するのではなく、話し手が視点を移動させながら描写し、描写される対象である選手と共感しようとするのである。

図1の事例を見てみよう。この試合はイングランドプレミアリーグ2013-2014シーズンのManchester United. と Manchester City の試合である。試合開始早々、Manchester City のコンパニー（Kompany）選手が自陣のペナルティエリア付近でパスを受け、ドリブルをした後パスを出そうとしたところ、相手チームである Manchester United のウェルベック（Welbeck）選手にボールを奪われそうになった場面である。(1)と(2)はそれぞれこの場面の英語と日本語の実況解説である。(1)のSはサマライザー、Cはコメンテーター、(2)のAは実況アナウンサー、Hは解説者である。

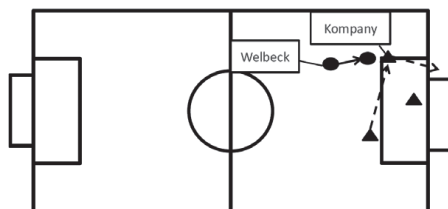


図 1

(1) 01 S: And immediately Kompany, trying to clear it, but charged down by Danny Welbeck  
##### Welbeck could have been in.

02 C: What a cracking start by Danny Welbeck and I think he's claiming that it should have been a corner for Manchester United. But Howard Webb has dismissed it. But Kompany was a little sluggish. He could have delivered that quicker and he allowed Welbeck to make up the ground. And we just watch Kompany, does he get the last touch on it, perhaps not.

(2) 01 A: ウェルベックがいきなり行きます。ウェルベック、ウェルベック。コンパニーがカバーしました。ゴールキックです。今日は(はい)ウェルベックがトップで、ファンペルシーが外れました。今日の試合の主審はハワード・ウェブです。コンパニーも怪我から戻って来たばかりですが。

02 H: はい、ちょっと今、あの、余裕を持ちすぎてしまってね、「まだ相手も寄せないだろう」と思ったら、相手に当たってしまって、ちょっとひやっとしましたね。

(1)の英語の実況解説では、1行目にサマライザーのSがコンパニー選手がボールをクリアしようとしたが、ウェルベック選手に迫られ、ボールを取られそうになったことを述べる。その後コメンテーターのCがコンパニー選手の動きが遅かったこと、もっと早くクリアができたこと、ウェルベック選手につけ入る隙を与えてしまったことを客観的に描写し、このプレーを批評している。

一方、(2)の日本語の実況解説ではAがウェルベックの動きを描写し、ゴールキックになったことを述べた後、解説者のHが2行目で「「まだ相手も寄せてないだろう」と思ったら」と内的引用を用いて、客観的に目に見える選手たちの動きだけではなく、描写対象である選手の思っていることを推察し、その内容を描写している。単に目の前で起こっている出来事を客観的に述べるのではなく、話し手が視点を移動させながら描写し、描写される対象である選手と共感しようとする特徴が日本語のディスコースには観察される。

### 3.2 分析的把握と全体的把握が現れた実況中継

多々良 (2017) では、日本語の実況中継では、選手がミスした際に「雨の影響、相当出ているんじゃないでしょうかね」と述べたり、自陣ゴール前で後ろから相手チームの選手が迫ってくるのに気付かず得点を許してしまった時に「この大歓声でもしかしたら声が届かなかったこともあったかもしれません」と発言したりすることなどに見られるように、天候やグラウンド状況など、選手を取り巻く環境を描写することが非常に多く観察されることが指摘されている。これは Nisbett et al.(2001)が東洋の文化的考え方を「全体的把握(holistic cognition)」の観点から説明していることや、井出 (2016) や藤井・金 (2014) などが述べている、人間は「場」の一要素として様々なものと共存し、全てのものが相互に

関連し合いながら、影響し合いながら存在しているという場の理論の考え方から説明できるだろう。選手たちは場における一部であり、相互に影響しあっていると考えられ、選手がミスをした場合であっても、話者は個の責任だけを追求するのではなく、状況要因やその他の選手との関連の中でミスが生じたと捉える傾向が表れていると言える。このように選手のミスを描写する際に状況要因に言及することは、選手のおかれている状況を描写することで、選手を全体の一要素として位置づけ、様々な要素が関連し合っている状況全体を把握するための情報を提供していると考えられる。

図2はFIFA World Cup 2018ロシア大会のグループリークB初戦スペイン対ポルトガルの試合におけるプレーである。後半41分にポルトガルのクリスティアーノ・ロナウド(以下ロナウド)選手が味方からのパスを受けると、スペイン代表のディフェンダーであるピケ選手によってペナルティエリア付近で倒され、フリーキックを得た。ここまでのスコアは3-2でスペインがリードしているが、このフリーキックをロナウド選手が決め、土壇場でポルトガルが同点に追いついた場面である。(3)と(4)はこの場面の英語と日本語の実況解説である。(3)のSはサマライザー、Cはコメンテーター、(4)のAは実況アナウンサー、Yは解説者である。

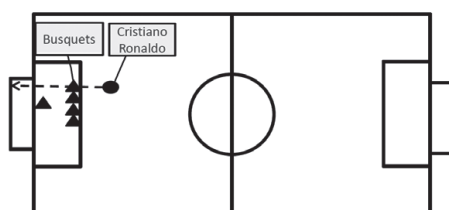


図2

- (3) 01 S: And Silva went to the deck and ##### with Ronaldo and free kick now for Portugal, right in Cristiano Ronaldo range. As we dip inside the last four minutes of normal time.
- 02 C: Yeah, it's a foul. And it's silly from Pique because Ronaldo is going back away from goal. He doesn't need to make that challenge there. And we saw in the game of Uruguay against Egypt, a needless foul for a set piece towards the end of the game, then Uruguay scored and won the game one-nil. That's another needless foul there. And you've given Cristiano Ronaldo, who hasn't had a sniff in the second half, an opportunity.
- 03 S: Sitting on a hat trick, sitting on the European record for international goals, trying to rescue a point for Portugal, in an opening night for them at the World Cup as European champions. David de Gea already let two past him tonight. ##### that was window dressing. Ronaldo ... through! Cristiano Ronaldo! World Cup hat trick and with still three minutes to play. It's three-all.
- 04 C: And the stage was set for the grand master, and he delivers. Silly foul from Pique, an opportunity for Ronaldo to get Portugal in it. And the last minute. And what a beauty it

is. He bends it with pace around the wall, the technique through the middle of it toward dips, right underneath, nothing David de Gea can do. He knows it. They came to see Ronaldo, and he delivered.

05 S: He's done it over 50 times in his career for the club and country.

06 C: Pique's foul that set it up. There's no chance, based on the last 25, 30 minutes, John, that Portugal should even have the chance right now. They looked dead and buried. Spain was passing them to death. And they get the slightest lifeline, to one of the best players in the world. And those are the fine margins at this level. And for now, for Spain, if this one ends three-three, it will effectively feel like a loss. Points lost for them and points gained for Portugal. What a shift.

(4) 01 Y: あー収まりましたね。

02 A: [1 あーつとー

03 Y: [1 おーつとー。いやあ、縦一本…いやあ、さっきより内側の、内側に入って来ましたか[2 ね。

04 A: [2 ええー ゴールラインからペナルティーエリアのラインまでが16.5メートルです。

05 Y: あ、20メートルくらいですか[3 ね。

06 A: [3 ええ

07 Y: まあ近すぎると落とすのも難しいですけ[4 ど

08 A: [4 はい

09 Y: これくらいあったら十分落とせますし、またこの人はスピードボール@蹴れますから[5 ね@

10 A: [5 はい。シンプルに考えれば、ロナウドならゴールの右の高い位置に縦回転で落として来るボールというのが、まあ多いんですが、さあどんなボールを蹴るか、ゴールキーパーのデヘアは左寄り。かなりヤマを張った、ヤマを張ったと言いますか

11 Y: まあ、壁の後ろはねえ、一応、あの壁で守る

12 A: はい

13 Y: 空いたところをキーパーというのがね、あのセオリーなんですけどね

14 A: もう一対一の勝負だ。縦に落とし[6 たあー

15 Y: [6 おー

16 A: 追いつきましたクリスチアーノ・ロナウド！ハットトリック！

17 Y: あの、今ね、壁、ライン引いた、ひ、引かれてるんですけど、本当にちょっとずつわからないように、前に出てるんですよ。それでもその上を越えて来ましたから

ね。まあキーパーとしたらあそこに行ってしまったらもうしょうがないというコースですね。

18 A: 一番高い壁を、<sub>7</sub>あ、外から来ていますね

19 Y: <sub>7</sub>いやあ <sub>8</sub>ブスケツの上です<sub>8</sub>ね

20 A: <sub>8</sub>ええ

21 Y: ブスケツ 190、190ですから、89ですから、この上からですと、頭出してますけどね

22 A: パーフェクトなゴールで追いつきました、3対3

23 Y: いやあ、何があるか本当にわからないゲームです<sub>9</sub>ね

24 A: <sub>9</sub>ワールドカップ！これが両チームにとっての初戦。今大会64試合の最後はどんな結末が待っているのか

25 Y: いやあ、もうちょっと長く@やっては<sub>10</sub>いいですね@

26 A: <sub>10</sub>@ええ@

(3)の英語の実況中継では、まず1行目でサマライザーのSがピケ選手のファールを指摘し、ロナウド選手にとってフリーキックを蹴る非常に良い位置であることを述べる。その後2行目でコメンテーターのCがピケ選手のファールを批判し、不必要なファールでロナウド選手にチャンスを与えてしまったことを指摘している。そして、ロナウド選手がフリーキックを見事に決めると、3行目でSが“Ronaldo…through! Chistiano Ronaldo!”とロナウド選手がゴールを決めたことと彼の名前に言及し、ハットトリックを達成したこと、試合時間が3分残っており、3対3の同点になったことを述べる。次に4行目でCがロナウド選手がゴールを決めたこと、ピケ選手のファウルから生まれたチャンスをものにしたこと、非常に速い速度でボールを曲げ、壁をこえて、ボールを落としてゴールを決めたこと、キーパーのダヴィド・デ・ヘア (David de Gea) 選手が何もできなかったことを述べている。そしてリプレイで観客たちが画面に映り、彼らはロナウド選手を見に来ていること、そして彼がゴールを決めたことを述べている。

一方、(4)の日本語の実況解説では、英語とは異なりまずファールを犯したピケ選手に対する批判がなく、Yが3行目で「さっきより内側の、内側に入って来ましたからね」と述べ、ファールを犯してしまった理由を説明し、共感しようとしている。その後4行目から解説者のYと実況アナウンサーのAはフリーキックがゴールからどれくらいの位置なのか、キーパーや壁の位置がどのような状況かを述べ、どのようなボールをロナウド選手が蹴るのか推測している。その後ロナウド選手のゴールが決まると、14行目でAが「縦に落とした！」とそのボールの軌道を描写し、ロナウド選手のハットトリック達成について言及する。その後解説者のYはロナウド選手のプレーについて述べるのではなく、彼を取り巻く状況である相手チームの壁について描写し始める。18行目からAとYが壁のどこを超えたのかということに関して話し始めるが、21行目でYがスペイン代表の壁の中に入って

いたブスケツ (Busquets) 選手の身長について「ブスケツ 190、190ですから、89ですから、この上からですと、頭出してますけどね」と述べ、どれだけ高い壁を越えてゴールを決めたのか描写している。

このシーンの英語の実況解説ではロナウド選手の動きやプレーを分析的に描写している一方で、日本語の実況解説ではゴールを決めたロナウド選手のプレーを描写するよりも、彼のおかれている状況を詳しく描写し、この状況を乗り越えて生まれたこのゴールがいかに素晴らしいのかということを述べることで称賛をしているということが出来るだろう。多々良 (2017) ではミスをした選手を批判する際に、英語のようにその選手とプレーだけを言及し批判が展開されるのではなく、選手たちが置かれている状況や相手選手との関連性を描写することが日本語の実況解説では観察されることが指摘されているが、選手を賞賛するディスコースでもその選手 (だけ) を中心に述べるのではなく、選手を状況全体の一要素として位置づける全体的把握 (Nisbett et al. 2001) の傾向が表れていると言えるだろう。

### 3.3 日本語の実況中継において再生産される協調性や集団の重要性

日本の実況中継では「組織力」や「団結力」、「献身性」などの表現を多用し、集団としてのチーム、協調性を重視した物語を創り上げることがよくある。黄 (2005) はFIFA World Cup 2002日韓大会における日本の新聞報道を分析しているが、実際にチームが行った戦術とは異なる報道がされていたことを指摘している。新聞各紙は日本代表がグループリーグを突破した理由について、「体力面で劣る」日本が「組織力」や「組織プレー」で勝利をおさめた事を強調しているが、実際に選手たちが取った戦術は、走り勝ちを狙った「体力勝負」の戦術であったのである。そもそもサッカーはチームスポーツであるため、組織的な集団であることは当然の事であるが、この「組織力」や「団結力」などの集団としての重要性や協調性を強調する表現が実況中継などで繰り返し使用されることで我々の中には「日本人の特徴」や「日本人としてどうあるべきなのか」という考えが構築されているということが出来るだろう。

同様のことが他国のリーグ戦や国際大会における試合の実況中継においても行われ、「集団の重要性」や「協調性」を基にした物語として我々の元へ届けられている。(5)と(6)はイングランド・プレミアリーグ2013-2014シーズンChelsea FCとCardiff United.の試合の事例で、チェルシーのラミレス選手が相手のギュンナルソン選手からボールを奪った直後、そのボールを受けたオスカル選手が3点目のゴールを決め、試合を決定づけた場面の英語と日本語の実況中継である。(5)のSはサマライザー、Cはコメンテーター、(6)のAは実況アナウンサー、Fは解説者を指す。

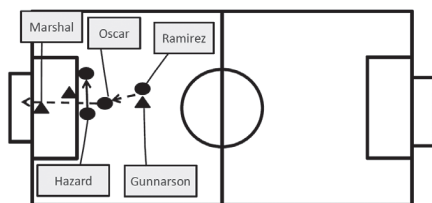


図3

(5) 01 A: Gunnarsson seemingly unaware with Ramirez, Oscar, Oscar! Another fabulous finish with the boy from Brazil and that should settle the issue in Chelsea's favor.

02 B: I think Gunnarsson is guilty of giving the ball away, he'll get struck off in possession here and Oscar makes him pay. Still think he went a little bit central and Marshal maybe a little bit shall we say unhappy that he maybe didn't get a touch on this one but you can see the ball bounces down, Gunnarsson gets it wrestled away from him by Ramirez. That's when I'm talking about making good possession, comes inside, that's straight over the head of Marshal. It's a good strike, it's by no means chipped in, I think he's got to stop that one from Marshal. I think he's going to get a touch on this ball, it's a great nick from Ramirez in mid-field. Gunnarsson just trying to get around him and then Oscar gets his shot away well, but for me this should be a save from the keeper.

(6) 01 A: いい位置で奪いました。そしてチャンスになった。前を向いた、オスカル、オスカル、仕掛けて、右足に持ちかえてシュート、[決めましたあ！

02 F: [いやあ、うまい！これはうまい！

03 A: オスカルのシュート、チェルシー3点目。

04 F: 取ってから、まあオスカルがフリーになったと。左サイドから味方も走ってくれたので、ある程度余裕が持てましたよね。

05 A: 後半33分、チェルシーに追加点、オスカルの今シーズン4点目、2試合連続のゴールになりました。

(リプレイ)

06 F: これを取りにラミレスが行ったっていうのが大きいと思いますよね。走った分だけ少し余裕ができて、

07 A: はい、まあ、しかしこれは17番前を向いたアザールの、まあ、記録に残らないアシストとも[言えるような動き

08 F: [そうですね それがあったからこそちょっとオスカルも余裕が出せたんで、余裕がでたというか。

09 A: はい

(5)と(6)を比較すると、英語の実況中継では得点を決めたオスカル選手を賞賛すると同時に、得点を許す原因となったカーディフの選手（ボールを奪われたギュンナルソン選手とキーパーのマーシャル選手）を批判している。同じ場面の日本語の実況中継では得点を奪われた側の選手を批判するのではなく、オスカル選手を賞賛した後、彼のサポートをしたアザール選手について言及している。4行目の「左サイドから味方も走ってくれたので」や7行目の「これは17番前を向いたアザールの、まあ、記録に残らないアシストとも言えるような動き」などと、英語の実況中継では言及されていない選手間の協力、チームとしてのプレーに焦点を当て、日本的なストーリーに創り上げていると言えるだろう。

(7)と(8)はFIFA World Cup2014ブラジル大会決勝ドイツ代表対アルゼンチン代表の試合における一場面である。両チーム無得点のまま延長戦に突入し、アルゼンチン代表のパラシオ選手がドイツ代表の選手にファールをした際に、ベンチにいるドイツ代表の選手たちが審判に対してベンチを飛び出して抗議している場面における実況解説である。(7)のCはコメンテーター、(8)のAは実況アナウンサー、Fは解説者を指す。

(7) 01 C: You see that the German bench going crazy. Something I don't know they  
still challenge on Schweinsteiger, still out arguing with the referee's assistant #####  
(中略)

02 C: Yeah on the bench again, the referee is telling them, yes it was a foul, but  
that's all it was...#####...it's a simple foul. I don't know what the German  
bench want.

(8) 01 F: もうドイツベンチ前がすごいんですよ。

02 A: 今パラシオのプレーに対して、ちょっと悪質でイエローカードではないかという  
ようなアピールをしています。

03 F: シュバインシュタイガーが怪我した時もね、ケディラはもう相手ベンチ前まで行  
くくらいですから、ベンチも一緒に戦っているっていうところがね、伝わってる  
でしょうね。

(7)の英語の実況解説では、ドイツ代表のベンチが抗議をしていることを述べると同時に、これは単純なファールであり、なぜ彼らがまだ抗議を続けているのかわからないと疑問を投げかけている。一方(8)の日本語の実況解説では、この場面でドイツ代表のベンチが抗議をしていると述べた後、解説者のFが3行目で「ベンチも一緒に戦っているっていうところがね、伝わってるでしょうね」とプレーをしている選手とベンチにいる選手の一体感、チームとしての団結の重要性を強調する物語が創り上げられているのである。

このように英語と日本語では同じ選手の行動や出来事が異なる形で解釈され、異なる物語を創り上げるために使用されることがあり、このようなディスコースを通じて各言語文

化において重要であると考えられている文化的価値観が再生産されているということができらるだろう。

#### 4. おわりに：今後のメディアスポーツ研究の可能性

サッカーの実況中継の参与者たちは、ボールと選手が絶えず移動する流動的でシナリオのない試合を即興的に描写、解説することが求められる。本稿で見てきたように、実況中継の参与者たちはそれぞれの言語文化において求められている情報を提供することが求められるわけだが、同じ試合や場面を言語化する際にも、英語と日本語の話者は出来事の異なる側面に注目し、異なる物語を創り上げているのである。

本稿では英語と日本語の同じ試合の実況中継を比較分析したが、上述した通りスポーツはオリンピック・パラリンピックやワールドカップなどの国際大会を中心に、世界各地で様々な言語で実況報道されており、各言語で注目され言語化される認知資源や好まれる言語表現の特徴、さらに各言語における相互行為の特徴を比較分析するためには非常に良いデータである。今後の課題として、メディアスポーツの対照研究は英語と日本語にとどまらず、スペイン語やドイツ語、中国語などその他の言語の実況中継をデータとして分析することを通じて、言語間の対照研究を更に深めていく必要があるだろう。

#### 注

本稿の図や事例において使用されている記号の内容は以下の通りである。

- ##### : 聞き取れない部分
- @ : 笑いを伴う発話
- [ : 同時発話を表す。
- [2 : 複数の同時発話が連続して起こるとき、2つ目以降の同時発話の順番を示す。
- : 選手の動き
- (点線) : ボールの動き

#### 参考文献

- Beard, Adrian (1998) *The Language of Sport*. London, New York: Routledge.
- Ferguson, Charles A (1983) Sports Announce Talk: Syntactic aspects of register variation. *Language in Society*, 12: pp. 153-172.
- 藤井洋子・金明姫 (2014) 「課題達成過程における相互行為の言語文化比較」『解放的語用論への挑戦』くろしお出版. pp. 57-90.
- 深澤弘樹 (2010). 「スポーツ実況中継における『物語』－全国高校サッカー選手権決勝戦を例に－」『経営情報学論集』16: pp.109-125.
- 深澤弘樹 (2012). 「スポーツ実況研究の視座－『物語』の視点を中心に－」『駒沢社会研究』44: pp. 81-

- Gerhardt, Cornelia (2008) Turn-by-turn and move-by-move: A multi-modal analysis of live TV football commentary. In Lavric, Eva et. al. (eds.) *The Language of Football*, pp. 283-294. Gunter Narr Verlag Tübingen.
- Goffman, Erving (1981) *Forms of Talk*. Pennsylvania: University of Pennsylvania.
- 黄盛彬 (2005) 「W杯と日本の自画像, そして韓国という他者」有元健・小笠原博毅 (編) 『サッカーの詩学と政治学』人文書院: 175-210.
- 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』くろしお出版.
- 井出祥子 (2014) 「解放的語用論とミスター・オー・コーパスの意義—文化・インターアクション・言語の解明のために—」『解放的語用論への挑戦』pp. 1-32. くろしお出版.
- 井出祥子 (2016) 「グローバル社会へのウェルフェア・リングイスティックスとしての場の語用論—解放的語用論への挑戦—」『社会言語科学』第18巻第2号: pp.3-18.
- Krone (2005) *The Language of Football: Contrastive Study of Syntactic and Semantic Specifics of Verb Usage in English and German Match Commentaries*. Stuttgart: ibidem-Verlag.
- 三宅和子 (2004) 「スポーツ実況放送のフレーム—放送に向けられた視聴者の不快感を手掛かりに—」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰 (編) 『メディアとことば 「マス」メディアのディスコース』pp.94-126. ひつじ書房.
- Nisbett, Richard E., Peng, Kaiping, Choi, Incheol, & Norenzayan, Ara. (2001) Culture and systems of thought: Holistic versus Analytic Cognition. *Psychological Review* 108 (2): pp.291-310.
- 野村佑子 (2006) 「語り手は何に注目するのか?—引用から見る日米語のナラティブ」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』13: pp. 83-93.
- 岡田光弘 (2002) 「スポーツ実況中継の会話分析」橋本純一 (編) 『現代メディアスポーツ論』pp. 163-195. 世界思想社.
- 岡本能理子 (1999). 「オリンピックマラソン実況放送のアナウンサーの談話管理—謙譲語と名詞どめの機能を通して—」『東京国際大学論叢 国際関係学部編』5: pp. 57-70.
- 劉礪岩・細馬宏通 (2016). 「カーレースにおける実況活動の相互行為分析—出来事マーカーとしての間投詞と実況発話の構成—」『社会言語科学』18(2): pp. 37-52.
- 多々良直弘. (2017) 「メディア報道における批判のディスコース—スポーツ実況中継において日英語話者はどのように批判を展開するのか—」『社会言語科学』第20巻第1号: pp.71-83.
- 植野貴志子 (2016) 「融合的談話の「場の理論」による解釈」『待遇コミュニケーション研究』第13号: pp.18-33.
- 山本浩 (2003). 「ワールドカップ実況放送の現場から」『マス・コミュニケーション研究』62: pp.58-81.

## 映像資料

- 2013—2014シーズン, イングランド・プレミアリーグChelsea FC対Cardiff City FC (2013年9月22日, 於: Stanford Bridge Stadium, 4対1) NHK BS1, Sky Sports.
- 国際親善試合イングランド代表対ブラジル代表 (2013年2月6日、於: Wembley Stadium, 2対1) BBC.
- FIFA WorldCup2014 ブラジル大会決勝 ドイツ代表対アルゼンチン代表 (2014年7月13日, 於:

Estádio do Maracanã, 1 対 0 ) NHK, ESPN.  
FIFA WorldCup2018ロシア大会グループリーグ スペイン代表対ポルトガル代表(2018年6月16日,  
於: Fisht Stadium Sochi, 3 対 3) NHK, FOX Sport.

